愛と慈悲

―仏教思想における「愛」の諸相―

田路　慧

［要　旨］

「愛」は人間存在の根幹をなし、人生における必要不可欠の要素である。現代、人間社会の砂漠化が喧伝され、愛の不毛がいたるところで嘆かれている。しかし愛の重要さを強調する人や書物は多数あるが、愛の何たるか、愛の意味、内容、本質を解明したものはまれである。本論では仏教思想を基に愛の概念を解明しようと試みたものである。仏教における愛の概念は「愛執・愛着・貪愛・愛欲・渇愛・愛楽・自己愛・親愛・慈・悲・慈悲」とその用法は多種多様である。これらの愛の概念を、仏祖釈尊の言説に最も近いといわれる最初期の仏典によって解明するものである。

［キーワード］　「渇愛」　「無明・煩悩」　「自愛」　「友愛」　「慈悲」

はじめに

仏教思想は周知のように広大にして多種多様であるので、本論では主として最初期仏教経典を中心に、その中で述べられた愛に関する思想を明らかにしたいと思う。当然ながら、弟子たちが釈尊の説法を暗記、口伝し、後々に記述した仏典には体系的、論理的な愛の論述はない。そこで仏典において愛という語をもって訳された言説、愛を意味する内容をもった言説を調べ検討することによって、仏教思想における愛の概念を解明し「愛」の探究の一助にしたいと思う。

煩悩としての愛

貪愛 rāga にひとしい火は存在しない。ばくちに負けるとしても、
憎悪にひとしい不運は存在しない。
このかりそめの身にひとしい苦しみは存在しない。
やすらぎにまさる楽しみは存在しない。

『ダンマパダ』　二〇二

愛するもの piyatō から憂いが生じ、愛するものから恐れが生ずる。
愛するものを離れたならば、憂いは存在しない。
どうして恐れることがあろうか？　同　二一二

親愛 pematō から憂いが生じ、親愛から恐れが生ずる。
親愛を離れたならば憂いが存在しない。
どうして恐れることがあろうか？　同　二一三

快楽 ratiyā から憂いが生じ、快楽から恐れが生ずる。
快楽を離れたならば恐れは存在しない。
どうして恐れることがあろうか？　同　二一四

愛欲 kamatō から憂いが生じ、愛欲から恐れが生ずる。
愛欲を離れたならば憂いは存在しない。
どうして恐れることがあろうか？　同　二一五

渇愛 taṇhayā から憂いが生じ、渇愛から恐れが生ずる。
渇愛を離れたならば、憂いは存在しない。
どうして恐れることがあろうか？　同　二一六

恣のふるまいをする人には愛執 taṇhā が蔓草のようにはびこる。
林の中で猿が果実を探し求めるように、
生より生へとさまよいめぐる。　同　三三四

この世において執着のもとであるこのうずく愛欲 taṇhā のなすがままである人は、もろもろの憂いが増大する。
ー雨が降った後にビーナラ草がはびこるように。　同　三三五

愛欲に駆り立てられた人々は、
わなにかかった兎のようにばたばたする。
束縛の絆に縛られ執着になずみ、
永いあいだ繰り返し苦悩を受ける。　同　三四二

もしも、ある人が、自分自身の妻だけで満足せずして、娼婦のところに出入りしたり、他人の妻のところに出入りするならば、これこそ破滅への徴候である。　『スッタニパータ』　一〇八

もしも、ある男が、壮年が過ぎているにもかかわらず、ティンバル果のような乳房の盛り上がった女性を娶って、彼女を若い男に取られるかもしれないと、嫉妬に駆られて夜も眠られないならば、これこそ破滅への徴候である。　『スッタニパータ』　一一〇

このように、仏教では愛、愛欲、ないし欲、貪と漢訳され、あるいは渇愛と現代語訳される「愛」という心の情念は、人の心を駆り立て、かき乱し、煩わせ悩まし狂わして、憂、哀、愁、悲、苦、悩を生み、さまざまの悲劇をもたらす元凶として、否定克服すべき煩悩とみなされている。愛、ないし渇愛 taṇhā とは砂漠でのどの乾いた人が水を求めるような強烈な渇きであり衝動である。強烈に求めてなかなか得られない時は激しい焦燥と敵対心と怒りを生み、得られれば激しく貪り、なくなれば更に求めて飽くことを知らず、得たら得たで更に愛着し、手放すまいと執着する。得られなければ怒りに身を震わせ、与えない者得たものを憎悪し嫉妬し、奪い取ろうと攻撃しようとし、あるいは絶望して自暴自棄となる。愛・渇愛はあくまでも自己中心的で、求め、奪い、合体し、自分のものとしようとする我執我欲に基づく、いわばギリシャ思想におけるエロース eros に匹敵する愛である。仏典では愛執、愛染、貪愛、愛欲、愛結、愛流、愛溺、愛羂、愛獄、愛鬼といった否定的な煩悩を表す熟語をもって使用されることが多い。

「渇愛 taṇhā」についてもう少し詳しく見てみよう。

この世は渇愛によりて動かされ、また、渇愛において悩まさるる。
ただ渇愛なる一つのものありて、すべてのものを
隷属せしむるなり。　『相応部経典』　一ー六三「渇愛」

「友よ、いったい、渇愛とは何であろうか」
「友よ、それは欲の渇愛（欲愛）、有の渇愛（有愛）、無有の渇愛（無有愛）である。友よ、これらの三つが渇愛である」
『相応部経典』　三八ー一〇「愛」

このように「渇愛」には、さまざまの欲望をむさぼる渇愛、何としてでも生きたいという生存を貪る渇愛、そしてさらに生存の滅無を目指す、非存在への衝動ともいうべき渇愛が挙げられている。確かにわれわれの中には破壊衝動、破滅志願、死への衝動といった情動のあることは疑い得ない。これが殺人や破壊や戦争、自殺や破滅へと人々を駆り立てるのである。この無有愛はフロイトの言うタナトス thanatos、またエーリッヒ・フロムの言うネクロフィリア necrophilia の欲動に匹敵するものということができよう。かくてこの渇愛こそわれわれが滅尽すべき最大の対象なのである。

ところで欲・貪愛・愛欲・愛執・愛楽、要するに渇愛そのものは、それ自体としては悪ではない。仏教では欲・愛そのものは無記すなわち善でも悪でもないとする。

水もし常にあるならば、井戸を以て何をかなさん。
欲（愛）まったくなからんには、なにものをかたずね求めん。
『ウダーナ』　七－九

清らかな水がいたるところにあれば、井戸など必要ないように、欲・愛がなければ仏道も修行も不必要である。愛・欲が無ければなにものもなされることはないであろうし、生まれ、生きるということも無くなるであろう。仏教は禁欲主義ではないのである。

比丘たちよ、出家した者が近づいてはならぬ二つの極端な立場がある。その一つは快楽に偏する立場である。もろもろの欲望にひたすら愛着することは下劣であり卑しい。凡夫の諸行であって聖者のそれではなく、無益である。

もう一つは禁欲に偏する立場である。みずから苦行をこととするのは、ただ苦しいだけで無益である。聖者のわざではない。わたしは、この二つの極端を捨てて中道をさとった。これが目を開き智を生じ、さとりと自由を得る道である。『律蔵』大品　一－六

釈尊は快楽主義、禁欲主義の両極端を廃し、中道の立場に立ち、これこそさとりへの道であるという。ではなぜ欲や愛、渇愛が否定克服さるべき苦悩や諸悪の元凶となるのであろうか。

欲と瞋恚は何が原因であろうか。
倦怠と愛好、身の毛のよだつ思いはどこから生ずるのであろうか。
雑念はどこから起こり、心をあらぬ方向に放っては
弄ぶのであろうか。子供たちが紐をつけた烏を放って弄ぶように。
貪欲と瞋恚は自己が原因である。
倦怠と愛好、身の毛のよだつ思いは自己から生ずる。
雑念は自己から起こり、心をあらぬ方向に放っては弄ぶ。
その汚れが、愛着によって芽を出し、自己から生え伸び、
自己存在の構成要素（蘊）から萌え出ずるのは、
ニグローダ樹の若枝が、湿気を得て芽を出し、
ニグローダ樹自身から生え伸び、
幹から萌え出ずるのと同じであり、
ありとあらゆる仕方で、欲望の対象に絡みついて伸びてゆくのは、

森の蔦葛が、ありとあらゆる仕方で、
木々に絡みついては伸びてゆくのと同じである。
『スッタニパータ』　二七〇～二

貪欲や愛欲、愛好や愛着、要するに渇愛は「自己」から、さらには「自己という存在を構成する五つの要素」すなわち「色（肉体）・受（感覚）・想（表象）・行（意志）・識（意識）」の「五蘊」から生じ、伸び、はびこるというのである。

ではなぜ自己、ないし五蘊から渇愛が燃え出ずるのであろうか。

比丘たちよ、縁起とは何であろうか。無明によって行がある。行によって識がある。識によって名色がある。名色によって六処がある。六処によって触がある。触によって受がある。受によって愛がある。愛によって取がある。取によって有がある。有によって生がある。生によって老死・愁・悲・苦・憂・悩が生ずる。これがすべての苦の集積のよって起こるところである。比丘たちよ、これを縁によって起こるというのである。

比丘たちよ、また、無明を余すところなく離れ滅することによって行は滅する。行を滅することによって識は滅する。識滅→名色滅、名色滅→六処滅、六処滅→触滅、触滅→受滅、受滅→愛滅、愛滅→取滅、取滅→有滅、有滅→生滅、生滅→老死…滅、これがすべての苦の集積のよって滅するところである。

『相応部経典』　一二―一　「法説」

「無明（根源的無智）→行（潜在的形成力）→識（識別作用）→名色（名称と形態・心身）→六処（眼耳鼻舌身意の六つの感官）→触（接触）→受（感受）→愛（渇愛）」とあるように愛（渇愛）は無明を原因とし原動力として生じ働くのである。「無明」とは一切の存在の真理である「縁起の法」に無知無自覚なることをいう。

「縁起」とは仏祖釈尊の正覚そのものであり、「これあればかれあり、これ生ずればかれ生ず。これなくばかれなく、これ滅すればかれ滅す」という法則の形で表され、「縁起の法」と呼ばれている。自己と自己の関わるこの世の一切の存在は「縁って起こっている」ものである、すなわち「因（原因）と縁（条件）に縁って成り立ち変動している」という世界のすべての存在の真理を顕現しているのである。自己もこの世のすべての存在も縁起仮和合の仮の存在であり、唯一絶対、永遠不滅の一切の支配者統括者のようなものは存在しない、すべては因と縁によって成り立ち、因と縁によって変化流転し留まることはなく、すべては縁起的世界を離れては存在しえないのである。したがって一切の存在は因と縁によって成り動き変化流転して留まることがないが故に「無常」であり、無常なるが故に自己の思うようにはならず「苦」であり、自分の思うようにならないものは自分ではなく、自分の本体でもなく、自分のものでもない、すなわち「無我」なのである。（「相応部経典」　一二―二〇「縁」等）

しかるに自我意識をもつわれわれ人間は、縁起的世界の中にあること、無常・苦・無我の道理の下にあることを知らず自覚せず、あるいは忘れ、さらには無視し否定して、自己を例外視、特別視し、絶対化して、我癡・我見・我慢・我執・我欲・我愛の盲目的衝動に

つき動かされ、自分さえ、自分だけは、と自分の欲望と快楽を渇望して、飽くことを知らない。これが無明であり根本煩悩である。この無明が潜在的形成力・欲動となって欲求する対象を識別し（識）、その姿を描き出し名称と形態（名色）を与えて具現化し、六つの感覚器官（六処）をフルに働かせて妄想し（触）、味わい得る快感を予感し、猛烈に求め渇望し、その快楽を貪り尽くそうとする、これが渇愛である。人は渇愛につき動かされ駆り立てられて目指す対象を手に入れよう（取）とあくせくと動き、ただそのためにのみ存在し（有）、ただこれのみを生きがいとし、渇愛に駆り立てられる人生となって固定する（生）が、求めるものを得るための競争は激しく、なかなか得られず、焦燥に駆られ、落ち着くことがない。たまたま得たら得たでもっともっとと更なる渇愛に駆り立てられ、あるいは失うまいといっそう愛執はつのり、不安と恐怖に取りつかれる。得られなければ愛執はいっそうつのり、怒りと憎悪と嫉妬に身を焦がし、絶望に陥り破滅破壊の衝動に取りつかれることになる。いずれにしても無常の風に吹きさらされ老い死にて無用となるはかなく空しいことばかりで、愁・悲・苦・憂・悩に苛まれるのみである。

この「十二因縁」と呼ばれる仏説は、縁起の法、無常・苦・無我の道理を知らず、あるいは忘れて、渇愛に駆り立てられ苦しむ普通の人々（凡夫）の姿を活写しているということができよう。

どのような苦しみも、すべて無明によって生ずるのである。
しかしながら無明を残りなく離れ、止滅するならば、
苦しみの生ずることはない。　『スッタニパータ』「二種随観経」

かくて無明の滅尽、すなわち無明からの解脱こそわれわれの最大の課題となる。しかし仏典においてはまず渇愛からの解脱が説かれる。それは渇愛が苦悩の直接的で強力な要因であることによるのであろう。

比丘たちよ、苦の聖諦はこれである。生は苦である。老は苦である。病は苦である。死は苦である。歎き・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みは苦である。怨憎するものに会うのは苦である。愛するものと別離するのは苦である。求めてえざるは苦である。総じていえば、この人間の生存を構成するものはすべて苦である。

比丘たちよ、苦の生起の聖諦はこれである。迷いの生涯を引き起こし、喜びと貪りを伴い、あれへこれへと絡まりつく渇愛がそれである。すなはち、欲の渇愛、有の渇愛、無有の渇愛がそれである。比丘たちよ、苦の滅尽の聖諦はこれである。この渇愛を余すところなく離れ滅して、捨て去り振り切り、解脱して、執著なきにいたることである。

比丘たちよ、苦の滅尽にいたる道の聖諦はこれである。いわく、聖なる八支の道である。すなわち、正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定である。

『相応部経典』　五六ー一一　「如来所説」

ラーダよ。色（受・想・行・識）において、欲・貪・喜・愛を断つがよい。そのように断つことによって、かの色（受・想・行・識）は、あたかもその根を断たれその頭を断たれたターラノ樹のように、まったく無に帰してもはや再び生ぜざるものとなるであろう。　『相応部経典』　二三ー九「欲貪」

一切の苦悩の因である渇愛より解脱する方法は「正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定」の八正道である。このうちの「正見・正思」こそ如実智見として無明を破し、一切が縁起所生であり、無常・苦・無我の仮の存在であることを直覚せしむるのである。したがって渇愛からの解脱は無明の滅尽と相即するのである。

色も受も想もはたまた行も識すらも、そは我にあらず我がものにあらず。かく知りてわれらは貪著せじ。貪著せざるがゆえに心安らかに、すべての煩悩の惑わしを超ゆ。

『相応部経典』　四ー一六　「鉢」

たとえ貨幣の雨を降らすとも、欲望の満足されることはない。
快楽の味は短くて苦痛である、と知るのが賢者である。
天上の快楽にさえもこころ楽しまない。
正しくさとった人の弟子は渇愛の消滅を楽しむ。

『ダンマパダ』　一八六～七

自　愛　自愛といえば否定的な意味に取られることが多い。しかし自愛にも否定的、肯定的の二つの意味があるといえよう。否定的な意味では、自己中心的で、自分さえ、自分だけはと、自分の快楽や利益のみしか考えないエゴイスティックな意味での自愛である。この自愛は自分に対する病的な愛着としてナルシシズムと呼ばれ、フロムは「他人の現実が自分の現実と異なることを認識できない・外界に対する関心の欠如・自分の物への愛着が強く客観的な判断ができないにもかかわらず自分は偏見が無く、自分は正しいと確信している」性向であると説いている。この性向が「自己を保護する力の化身としての母への強い依存・自立と自由と責任すなわち主体性の放棄喪失」といった近親相姦的固着、「権力暴力崇拝・サディズム・物化支配への欲動・死と破壊への衝動」といったネクロフィリアの情動と結合すると「衰退の症候群」を生み出し、悪性の破壊性と残忍性をもたらし、諸悪の根源となるとフロムは言う。まさに仏教のいう無明と利己愛と渇愛の結合である。

しかし肯定的な自己愛は利己愛ではない。否定的な自愛・利己愛は、自分の肉体・所有物、学歴・財物・家柄・権力・地位・名誉など、自分を飾る物を愛するのみで、自分自身は愛してはいないのである。真の自己愛は同じく自己保存の本能に根ざしても、自己のよりよき存在への成長を願い自重するものである。自己愛は否定するよりも、諸悪の根源たる利己愛・渇愛への転落を防ぎ、より高き愛へと昇華高揚すべきものなのである。

人のおもいはいずこへもゆくことができる。
されど、いずこへおもむこうとも、
人は、おのれより愛しいものを見いだすことはできぬ。
それと同じく、他の人々にとっても自分はこの上なく愛しい。
されば、おのれの愛しいことを知るものは、
他のものを害してはならぬ。

『相応部経典』　三ー八　「末利」

自分にとって最も愛しいものは自分である。これは疑いえぬ事実である。釈尊はこの普遍的な人間の事実から出発する。愛は自己愛を原点とする。しかしこの自愛の念を利己愛・渇愛へと堕さしめてはならない。それには先ず他の人々も自分が一番可愛いのだという事実を知り認めなければならない。これが無我の自覚である。自分が最も愛しているのは自分である、自分にとって最も大切なものは自分であると自覚した者は素直に自己を愛し、大切にし、自重し、守護すべきであろう。自己を心から愛することのできる者のみが、他をもこよなく愛することができるのである。

もしも人が自分を愛しいものと知るならば、自分をよく護れ、
賢い人は、夜の三つの区分のうちの一つだけでも、
慎んで目覚めておれ。　『ダンマパダ』　一五七

自分を愛すべき者としらば、自分を悪に結ぶことなかれ、
悪しき業をなすべき人々には、安楽は得がたきものなればなり。
『相応部経典』　三―四　「愛着」

この心は以前には、望むがままに、欲するがままに、
快きがままにさすらっていた。
今や私はその心をすっかり制御しよう。
像使いが鉤を持って、発情期で狂う象を全く抑えつけるように。
『ダンマパダ』　三二六

みずから自分を励まし、みずから自分を反省せよ、
修行者よ、自己を護り、正しい念いをたもてば、
汝は安楽に住するであろう。　『ダンマパダ』　三七九

実に自己こそ自分の主である。自己こそ自分の帰趣である。
故に自分を調御せよ。―馬商人が良馬を調教するように。
『ダンマパダ』　三八〇

それ故に心を護り、正しい思いに安住し、
正しい見解に基づいて、事物の生起と消滅とを知ったならば、
修行者は怠惰と睡眠に打ち克って、一切の悪処を捨て去るであろう。
『ウダーナヴァルガ』　三一―五四

友　愛　われわれ人間が何よりも願い求め、得ようとあるいは失うまいと努力し、得られない時あるいは失った時、心底からの孤独と悲哀と寂寥を感ずるものは、友愛、すなわち心おきなく話し合い分かり合うことのできる善き友、親友である。アリストテレスは中庸に基づく正義と友愛 philia を人間の追求体得すべき最高の価値と見なし、相互に友愛的であれば正義を要しないが、正義は友愛なしには成立せず、最高の正義は友愛的な正義であると述べて、お互いに善を目指す友愛に特別の価値を認めている。さらに彼は友愛に、利益、快楽、善それぞれに基づく三種の友愛を説き、利益や快楽ゆえの友愛はそれらが無くなれば消滅するので、善ゆえの友愛こそ真に永続する究極的な愛であるとしている（『ニコマコス倫理学』　第八章）。

釈尊も道を求め、同じ道を行くものどうしの友愛を高く評価し、善き友を持つことを強く推奨する。

比丘たちよ、朝、陽の出ずるにあたっては、まず東の空が明るくなってくる。すなはち、東の空が明るくなるのは、朝日の出ずるきざしであり、その先駆である。比丘たちよ、それと同じように、比丘たちが聖なる八支の道をおこすときにも、その先駆があり、そのきざしがある。それは善き友をもつということである。

比丘たちよ、だから、善き友をもった比丘は、やがて聖なる八支の道を習い始め、さらにいくたびとなく聖なる八支の道を修するであろうことが期して俟たれるのである。

『相応部経典』　四五ー四九　「善友」

アーナンダよ、善き友をもち善き仲間と共にある比丘においては、彼が聖なる八支の道を習い修め、ついに成就するであろうことを期して俟つことができる。その故に、このことはこの聖なる道のすべてであるというのである。

アーナンダよ、人々はわたしを善き友とすることによって、老いねばならぬ身にして老いより自由になることができる。病まねばならぬ身にして病より自由になることができる。死なねばならぬ人間でありながら、死より解脱することができる。

アーナンダよ、このことを考えても、善き友をもち善き仲間と共にあることが、この道のすべてであるという意味がわかるはずである。

『相応部経典』　四五ー二　「半」

己が罪過を指し示し、過ちを告げてくれる聡明な人に
会ったならば、その賢い人につき従がうがよい。
隠してある財宝のありかを告げてくれる人につき従うように。
そのような人につき従うならば、
善いことがあり、悪いことは無い。

『ダンマパダ』　七六

隊商こそは旅ゆく者の善き友なり。
慈母こそはわが家における善き友なり。
なんぞ事あるその時には、
朋友こそはいつも善き友なり。
おのれみずから積める功徳は、
やがて来ん世の善き友なるべし。

『相応部経典』　一ー五三　「友」

仏陀のもとで仏道修行に勤しむ善き友たちの集いが仏教教団「僧伽 saṃghā」である。善き仲間の集まりによって成立する社会が「清浄仏国土」すなわち「浄土」ある。この浄土の実現こそ仏教の理想なのである。

慈　悲　自愛心を根とし友愛を幹として生ずるのが「慈悲」の心である。一切世間の存在の真理である縁起の法に基づく無常・苦・無我、無自性・空の道理を自覚体得し、もろもろの悪と災いの根源

である無明・渇愛を滅尽して、至上の自由と安楽すなわち涅槃を得たとき、われわれのなすべきことは、苦しみ悩み悲しむ人々への抜苦与楽の慈悲の実践である。この世のすべては相依相資の相互依存関係にあるという縁起の真理の体得すなわち空・無我の道理の自覚は自己と他者は一如であるという自他不二の境地に導く。その時他者の痛み・苦しみ・悲しみは自分自身の痛み・苦しみ・悲しみとなり、無関心では過ごせなくなるのである。この心情が「慈悲」と呼ばれるものである。

「慈」の原語はパーリ語ではmettā、サンスクリット語ではmaitrī であるが，これらはmitrā（友・親しきもの）という語からの派生語で、「真実の友愛・純粋な友情」を意味する。「悲」の原語はパーリ・サンスクリット語ともにkaruṇāで，「うめく」という意味をもち、「同情・哀愍」「哀れみ・情け・優しさ」を表す。したがって、「慈悲」は語源的には「うめくものの友」を意味し、「傷つき・苦しみ・悲しむものへの純粋な友愛」を表している。そしてさらに「慈」は「生きとし生けるものに利益と安楽を与えようと望むこと」、「悲」は「生きとし生けるものの不利益と苦を除去しようと欲すること」と解釈されるようになった。仏教の慈悲の特色は対象が人間だけでなく、生きとし生けるものすべてに及ぶところにある。慈悲の心は「慈しみ」「憐み」「慈」「悲」といった言葉でも表されることが多い。まさに真理をさとって渇愛を滅尽し、至福・涅槃を得たものがなすべきことは、自己の幸せを一切世間に及ぼすこと、すなわち慈悲の実践なのである。

よく教えの道理を会得したものが、涅槃の境地を得た後
なすべきことはこれなり。
有能、率直、端正なること、善き言葉を語り、
柔和にして、高慢ならざること。
足ることを知りて養いやすきこと。
雑事に係わらず簡素に生きること。
五根を清らかにして、聡明であり見栄を張ることなく、
富裕な人々に媚びざること。
卑賤のわざをなして識者の非難を受くることなかれ。
ただかかる慈しみをのみ修すべし。
生きとし生けるもののうえに、幸いあれ、平和あれ、安楽あれと。
あたかも母がその独り子をいのちを賭して守るがごとく、
生きとし生けるもののうえに、かぎりなき慈しみの念いをそそげ。
また、一切世間のうえに、かぎりなき慈しみの念いをそそげ。
上にも、下にも、また四方にも、怨みなく敵意なく、
ただ慈しみの心をそそげ。
立つにも歩くにも座すにも臥すにも、
およそ眠りてあらざるかぎり、この慈しみの心を修得すべし。
これぞ聖なる境地（梵住）と呼ばるるものなり。

『スッタニパータ』　一一八　「慈経」

慈しむ（愛情を感じる）ことが慈mettāである。愛情（慈愛）があるという意味でる。友達に対する幸福、友達への行動、すなわち友にこの幸福をもたらすことまた慈である。人が不幸や苦にあ

るとき、よく同情するが故に悲 karuṇā である。あるいは人の苦を買い取り、取り除き追放し滅ぼすのが悲である。

『清浄道論』　「梵行住細説」

比丘たちよ、雨期の最後の一月には、雲一つない晴朗な秋空に太陽が昇ると、太陽は空中にあるすべての輝くものや、闇の中にあるすべてのものをしのいで光り、輝き、また照り映えている。

まさしくそのように、およそ来世において天上界に生まれるよりどころとなるいかなる功徳であっても、それらのすべては、とらわれを離れて慈しみに満ちた心の、一六分の一にも値しない。このとらわれを離れて慈しみに満ちた心は、それらをしのいで光り、輝き、また照り映えている。

心ゆるみなく、無量の慈しみの思いを修め、来世へのよりどころの消滅を見る人には、迷いの生涯への束縛は少ない。もし人がただ一つの生命にも、悪心なく慈しむならば、彼はそれにより善人となる。すべての生けるものに憐愍の心をもった聖なる者は多くの功徳を造りなす。国々を征服し供犠や祭祀をあまたなす王の功徳といえども、よく慈しみの心を修したる人の一六分の一にも及ばず。あたかも月に対する星くずの群れの如し。殺さず、殺さしむることなく、勝たず、勝たしむることなく、生きとし生けるものすべてに対し、慈しみの心あらば、何人も彼に怨みを抱くことなし。

『イティヴッタカ』　三―二七　「慈しみの修練」

キリスト教思想においては、第一の戒め、最高の実践課題として「アガペーの愛」が説かれる。それは「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」（「マタイ」二二・三五―四〇）という第一、第二の戒めによって示されている。「お互いに愛し合いなさい」（「ヨハネ」一三・三四―三五）という命令型の隣人愛は神を媒介とした、神への愛の証しである。仏教の慈悲は、自分の痛み、悲しみ、苦悩、絶望に呻いた者のみが持つ同悲同苦の共感同情であり、何とかしてあげたいという抜苦与楽の自然な情である。そして慈悲は神を信じない者にも、異教の神を信ずる者にも、さらに人間だけでなく生類すべてに及ぶのである。

慈悲の心術　われわれ人間の体得すべき理想の心術として「四無量心」、量りしれなく大きく広い利他の心が挙げられている。それらは「慈（与楽）・悲（抜苦）・喜（他の楽を喜ぶこと）・捨（差別しない平等平静な心）」である。

慈しみのあふるる心（慈）と、かぎりなく平静な心（捨）と、
憐れみ深い心（悲）と、歓びに満ちた心（喜）と
解脱の心を時に応じて修しつつ、
一切世間に違い背くことなく、まさに犀の角のように独り歩め。

『スッタニパータ』　「犀角経」　三九

慈悲は怨まず憎くまない忍耐と寛容に満ちた安らぎの心を身につけることである。

「かれはわれを罵った。かれはわれを害した。
かれはわれに打ち勝った。
かれはわれから強奪した」という思いを抱く人には、
怨みはついにやむことがない。
「かれはわれを罵った。かれはわれを害した。
かれはわれに打ち勝った。
かれはわれから強奪した」という思いを抱かない人には、
怨みはついにやむ。
実にこの世においては、怨みに報いるに怨みを以てしたならば、
ついに怨みのやむことはない。
怨みを捨ててこそやむ。これぞ永遠の真理なり。

『ダンマパダ』　三～五

怨みを抱いている人々の間にあって怨むことなく、
われらは大いに楽しく生きよう。
貪っている人々の間にあって、煩いなく、
われらは大いに楽しく生きよう。
何物をも所有することなく、大いに楽しく生きよう。
光り輝く神々のように、喜びを食むものとなろう。
勝利からは怨みが残る。破れた人は苦しんで臥す。
勝敗を捨てて安らぎに帰した人は、安らかに臥す。

『ダンマパダ』　一九七～二〇一

無量の慈悲を修習して、正しく念ずるその人は、
依の滅尽を照見し、結もすでに滅すなり。
ただ一つの生をも怒ることなく、哀れむ人は善き人ぞ。
すべての生を慈しむ、聖者の福はいと多し。
人を殺さず殺さしめず、人を服さず服させしめず、
生きとし生けるものに慈しみの心あらば、怨みを抱くことあらじ。

『増支部経典』　八―一　慈品　一「慈」

キリスト教においても「敵を愛し、憎む者に親切にせよ。呪う者を祝福し、辱める者のために祈れ。あなたの頬を打つ者には他の頬をも向け、あなたの上着を奪い取る者には下着をも拒むな」（「ルカ」六・二七―二九）とアガペーの愛の真髄が説かれている。しかし人間の情念において、怨み憎しみ妬み、嫌悪と怒りと復讐心ほど強いものはない。憎まず恨まず、敵を愛することなど人間にとって至難の技である。しかるが故にアガペーの実践には神の命令が、慈悲の実践には智慧の導きが不可欠なのである。

慈悲の実践―不殺害　慈悲心の基底をなすものは何よりも先ず一切の生きとし生けるものの生命の尊重である。それは害さず、害さしめず、殺さず、殺さしめないという実践となって発露する。

すべての者は暴力におびえ、すべての者は死を恐れる。
己が身にひき比べて、殺してはならぬ、殺さしめてはならぬ。
すべての者は暴力におびえる。

すべての生きものにとって生命は愛しい。
己が身にひき比べて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。
生きとし生けるものは幸せを求めている。
もしも暴力によって生きものを害するならば、
その人は自分の幸せを求めていても、死後には幸せが得られない。
生きとし生けるものは幸せを求めている。
もしも暴力によって生きものを害しないならば、
死後には幸せが得られる。

『ダンマパダ』　一二九～一三二

強い、あるいは弱い生きものに対して暴力を加えることなく、
殺さず、また殺させることのない人、
ー彼をわれはバラモンと呼ぶ。

『ダンマパダ』　四〇五

われは万人の友なり、万人の仲間なり、
一切の生きとし生けるものの同情者なり。
慈しみのこころを修して、常に無傷害を楽しむ。

『テーラガータ』　六四八

不害・不殺生 ahiṃsā、非暴力は仏道の心髄であり、われわれ人間の守り実践すべき五戒・十善戒の第一に挙げられている。

慈悲の実践ー四摂事　慈悲の実践は具体的には、苦しみ悩む衆生を摂取し救済するための「四摂事」あるいは「四摂法」と呼ばれる実践の体系にまとめられている。

比丘らよ、これらは四摂事なり、布施と、愛語と、世の利行、
よろしきとおりそれぞれの事に対して同事なす、
回る車のくさびに似、これ世の中の摂取なり。
智者は正しく摂取をば観察すれば大を得て、世の人々に賞賛さるる。

『増支部経典』　四ー四　「輪品」三二

布施（施与）の第一は法施（真理を教えること）、愛語の第一は願う者に真理の教えを繰り返し語ること、利行の第一は信・戒・慧・喜捨の境地に入らしめること、同事の第一はそれぞれの理解の程度に応じて立場を同じくして導くことである。

『増支部経典』　九ー一　「等覚品」一　力

四摂事の第一は「布施dāna」である。布施はあまねく施すことであり、財物を施す財施、真理を教える法施、不安や恐怖を取り除く無畏施がある。布施は三輪清浄といって、施者・受者・施物の三つに捕らわれこだわり差別しては布施とはならない。また財物がなくても誰でも可能な、捨身施・心慮施・和顔施・慈眼施・愛語施・床座施・房舎施の「無財の七施」が説かれるようになった。

「愛語」はやさいしい言葉をもって真理を教え導くことである。愛語は人の心を安らわせ、開かせる。人は皆心のこもったやさしい言葉に飢えているのである。

沙門ゴータマは、離間せるものを和睦せしむる人、親密なるものをますます親密ならしむる人として、和合を愛し、和合を好み、和合をもたらす言葉を語る人なり。

沙門ゴータマは、悪口を捨てて悪口を離れ、すべて過失なき、耳に楽しき、愛らしき、肝に銘じ、優雅にして、人々に喜ばれ好まるる、このような言葉を語る人なり。

沙門ゴータマは、綺語を捨てて綺語を離れ、時に適したる語をなし、真実を語り、義ある語をなし、法に合った語をなし、律義を伴う言をなし、明確にして区切りあり、義に適い、心に記せらるべき言葉を語る人なり。　『長部経典』　一　「梵網経」　一－九

「利行」は相手の利益になること、真理の体得と解脱に役立つことをすること、「同事」は相手に応じて同じ立場に立ち、気持ちを同じくして接することをいう。

慈心解脱　「四無量心」を修し、「四摂法」を実践するならば、われわれは渇愛を滅尽して、涅槃に入り、真の自由と至福を味わうことができるのである。これは「慈心解脱」と呼ばれる。されば先ず何よりも、慈しみの心を体得実践することより始めるがよいのである。

比丘たちよ、たとえば、早朝に百釜の布施をなし、日中にも百釜の布施をなし、さらに日暮にもまた百釜の布施をなすよりも、むしろ、早朝に瞬時の間慈心を修し、日中に瞬時の間慈心を修し、また日暮にも瞬時の間慈心を修したならば、その果はより大きいであろう。

比丘たちよ、されば、このように学ぶがよい。「われらは慈悲にあふれた自由なる心（慈心解脱）を修し、それをわが車となし、拠り所となし、そこに立ち、常にそれを心にとめて、どこまでもそれで行こう」と。

『相応部経典』　二〇－四　「釜」

未来の楽根たる福をば学ぼう。
布施と平静と慈しみの心を修めよう。
三つの楽因たるかかる真理を修め、
怒りなき楽しき世界に、智者は生る。

『如是語経』　一－第三品－二二

法を聞き、正しく見、満ちたりている者が、
ひとり静かにいるのは楽しい。
この世の生きとし生けるものを
自制心をもって傷つけないことは楽しい。
世間に対する貪欲を離れ、欲望を超えていることは楽しい。
うぬぼれを払い去ること、これこそが無上の楽しみである。

『ウダーナ』　二「ムチャリンダ」　一「ムチャリンダ」

渇愛のまったき滅尽による、貪欲の残りなき滅尽が涅槃である。
その涅槃に達した比丘には執着がまったくなくなったので、

ふたたび迷いの生存はない。
魔を征服し、自己との戦いに勝利を得る、
そのような人はあらゆる迷いの生存を超えたのである。
『ウダーナ』　三「ナンダ」　一〇「世間」

このように「無怨・無瞋・無害・安穏・有楽」の修得実践が慈心解脱への道である（『無礙解道』「倶存品」第四「慈論」）。一方、慈悲の実践による慈心解脱への道は、自己のうちなる「渇愛」と「無明」との激しい果てしない戦いでもある。渇愛を滅する「心解脱」と無明を破する「慧解脱」の探究による智慧に導かれないならば、慈悲も増上慢の偽善に転落し、相手を甘やかし、自主自立の主体性を奪い、慈悲魔と化す恐れがあるのである。

おわりに

大乗仏教になって「仏心とは大慈悲、これなり」（『観無量寿経』）とあるように、慈悲が仏・如来の本質とされ、仏の大慈悲にいかにしてあずかるかということが仏教徒の課題となる。さらに仏の無縁の大悲を象徴する菩薩として観音菩薩が特に信仰されるようになった。仏の智慧と慈悲に満ちた清浄仏国土の建設が仏道修行者・菩薩の使命とみなされ、慈悲を実践し浄土建設に邁進するようになることが、すなわち仏の慈悲にあずかることであるとされた。そしてすべての生けるものはかかる大慈悲心を仏性（仏への可能性）としてもっており、その開発実践である菩薩の道を歩むことが仏への道であり、われわれ人間の使命であるとされたのである。

善男子よ、大慈大悲を名づけて仏性となす。何を以の故に。大慈大悲は　常に菩薩に隨うこと、影の形に隨うがごとし。一切衆生、必定して当に大慈大悲をうべし。この故に説いて、一切衆生悉く仏性ありという。大慈大悲とは名づけて仏性となし、仏性とは名づけて如来となす。
『大般涅槃経』　第三二巻

もろもろの庶類のために、不請の友となり、群生を苛負して、これを（おのが）重担となす。如来の甚深の法蔵を受持し、仏の種性を護りて、常に絶えざらしむ。大悲を興して、衆生を愍れみ、慈弁を演べ、法眼を授け、三趣を防ぎ、善（趣）の門を開く。請われざるの法をもって、もろもろの衆生に施すこと（なお）純孝の子の、父母を愛敬するがごとし。もろもろの衆生を視そなわすこと自己のごとし。
『仏説無量寿経』

渇愛に駆られ、愛の迷妄に捕らわれ、この世の地獄を現出している人々が跋扈している現代、愛の実相について深く考え、学び、教えることが特に重要となっているのではなかろうか。

［文　献］

大正新脩大蔵経刊行会編『南伝大蔵経』全六〇巻七四冊　大蔵出版株式会社
梶山雄一他編『原始仏典』　全一〇巻　講談社
増谷文雄訳・編『阿含経典』　全四巻　筑摩書房
中村　元訳『ブッダのことば』　岩波文庫
中村　元訳『ブッダの真理のことば・感興のことば』　岩波文庫
（引用は主として南伝大蔵経を用いたが、現代語訳は中村元氏および増谷文雄氏によるところが多い。記して謝意を表したい。）
世界の大思想　Ⅱ―二　『仏典』　河出書房
世界古典文学全集　六　『仏典』Ⅰ　筑摩書房
中村　元著『慈　悲』　平楽寺書店
仏教思想研究会編・講座仏教思想　一『愛』　平楽寺書店
日本倫理学会編　『愛』　日本倫理学会論集　一六　以文社
『聖　書』　日本聖書協会
エーリッヒ・フロム著　鈴木重吉訳『悪について』　紀伊國屋書店
加藤信郎訳『ニコマコス倫理学』　アリストテレス全集一三　岩波書店

平成十年　十　月三十日受付
平成十年十二月二十五日受理